

実施報告書

HT25072

【プログラム名】 If the world were a village of 100 people.～理想の世界を描いてみよう～



開催日：平成25年9月8日(日)

実施機関：津田塾大学 小平キャンパス  
(実施場所) 津田梅子記念交流館

実施代表者：田近 裕子  
(所属・職名) (学芸学部英文学科・教授)

受講生：小学5年生9名・6年生5名

関連 URL：

【実施内容】

本プログラムは、『If the World Were a Village of 100 People (世界がもし100人の村だったら)』を題材としており、内容重視の英語教育を実施するプログラムである。約70億人が住む地球を100人の村に置き換え、地球上で生じている問題に目を向け、それを解決する方法を考える。本プログラムの最終目標は、自分たちが100人の村の住人だったらと仮定して、選んだテーマをもとに理想の世界を描き、それを絵とともに英語のチャンツで発表することであった。

〈留意・工夫した点〉

地球上で生じている問題を表す5枚の写真(※1)を受講者に見せる際には、まずは日本語を用いて受講者の興味を引きつけ、そのあとに英語によるストーリーテリングの内容が理解できるようにした。地球上で生じている問題の解決法を探ることがより効果的に行われるようにするために、プログラム当日の約2週間前に、事前学習を受講者に課した。事前学習で得た知識や考えたことが、当日のアクティビティに生かされるように工夫した。また、事前学習の内容は、図書館で調べられるものや家のインターネットを使って調べられるものにし、小学生にとって身近なツールを用いて取り組めるものにした。(例:「世界には働かなくてはならない子どもがいます。どんな仕事をしているのでしょうか?」)このように、課題内容と英語活動を統合して教える工夫を行った。

〈当日のスケジュール〉

10:30-10:45 開講式

10:45-11:05 アイスブレイキング

(お気に入りのポーズをとりながら、英語で自己紹介をする)

11:05-11:20 フォトランゲージ

(※1 ストリートチルドレン・少年兵・水不足・栄養失調・地雷を表す写真を見せながら、その写真が何を表しているのかを推測させる)

11:20-11:35 ストーリーテリング

(『世界がもし100人の村だったら』を自作の紙芝居を用いて、英語で読み聞かせる)

11:35-12:00 村人会議・チャンツ

(地球上で生じている問題の解決法をグループで考える。また、発表のイメージを高めるためにスタッフがモデルチャンツを披露する)

12:00-13:00 昼食・ゲーム

(昼食後、受講者同士の交流を深めるために、会場内に隠したパズルのピースを協力しあいながら探し出し、世界地図を完成させる)

13:00-14:10 発表時に使う絵の作成

(受講者が考えた解決法を絵で表す)

14:10-14:30 チャンツ練習

(各グループにスタッフが入り、受講者一人一人の解決法を織り込んだチャンツを指導する)

14:30-15:00 発表練習

(本番の発表が行われる場所に移動し、声の大きさや絵の持ち方などを確認する)

15:00-15:20 クッキータイム

15:20-15:40 リハーサル

15:40-16:00 発表会

16:00-16:30 修了式・アンケート記入

16:30 終了・解散

〈実施の様子〉

事前学習が手助けとなり、フォトランゲージやストーリーテリングの内容がよく理解できていたようだった。事前学習をさらに掘り下げて勉強してきた受講者もあり、積極的に発言することで仲間の興味を引きつけ、理解を深めてくれた。最初は緊張気味であった受講者もいたが、グループワークの際には次第に発言が増え、グループの仲間と協力しあう場面が見られた。「村人会議」のときには仲間と一緒に考えながら発言したり、仲間に意見を求めながら絵を描いたりするなど、協働学習をしている様子も見られた。また、チャンツ練習の際には一緒に英語を練習し、助け合ったりするなど、はじめて出会った受講者同士の交流が見られた。

最初はチャンツがなかなか言えなかった受講者もいたが、練習を重ねることにより、発表会ではリズムにのって保護者の前でしっかりと大きな声で発表することができた。(写真:村人会議の様子)



#### 〈事務局との協力体制〉

実施事務局とはきめ細かく打ち合わせを行う中で、企画・準備・運営などに関して多くのアドバイスをいただき、当日を万全な状態で迎えることができた。

#### 〈広報活動〉

今年度は、昨年度より少し広報活動の枠を広げた。具体的には、昨年度まではチラシを配布していなかった地域の小学校にもチラシを送付した。また、昨年度と同様に、大学の所在地である小平市の市報にも告知を依頼し、津田塾大学のホームページにもチラシを掲載していただいた。さらに、大学で実施した小学生対象の他の英語のプログラムにおいても宣伝活動を行った。

#### 〈安全配慮〉

受講者の安全配慮のために、各グループに必ず大学院生ほかのスタッフが1～2人がつくようにし、一緒に活動することで受講者一人一人に目が行き届くようにした。また、事前に受講生とスタッフ全員が保険に加入した。さらに、開場の際に一人一人の身元をチェックし、関係者以外に人が紛れ込んでいないことを確認した。その際、保護者にはクッキータイムで出すお菓子を見せながら、子どものアレルギーの有無の確認も行った。

#### 〈今後の発展性、課題〉

今回のプログラムは、英語での発表に加えて国際問題について考えるという、小学生にとっては非常にハードルの高いゴールを要求するものであった。企画の段階では、一日のプログラムで小学生に国際問題に目を向けさせ、その解決法を考えさせるということは難しいと想定したため、事前学習を課すことにした。その結果、事前学習によって受講者はある程度自信をもって当日のアクティビティに参加できたようである。この事前学習の有用性が来年度以降のプログラムのテーマの広がりにつながればと考えている。

しかし、英語でのチャンツの発表に課題が残った。受講者が考えた国際問題の解決法をスタッフが英語にする際、発音や語彙そのものを難しくせざるを得ないケースがあった。というのも、簡単な英語にしようとする、受講者が考えた解決法の意味とずれてしまったり、リズムに合わなかったりしたからである。次回以降、何をどのように発表させるかより深く考え、プログラムの最終目標が、受講者の認知レベルと言語レベルに合わせたものとなるように設定したい。

#### 【実施分担者】

林 さと子	津田塾大学学芸学部英文学科教授
吉田 真理子	津田塾大学学芸学部英文学科教授
稲垣 善律	津田塾大学学芸学部英文学科准教授
秋山 道子	津田塾大学学芸学部英文学科非常勤講師
豊嶋 朗子	津田塾大学学芸学部英文学科非常勤講師

【実施協力者】                     8名

#### 【事務担当者】

春山 直登      教務課研究支援室